倉城大略志

全

G 25
51

倉城大略誌

豊前國規矩（後ニ企救と書）郡到津郷小倉之城（俗傳ニ古ハ勝山の城と云勝）當城古ハ云一由ハ古城也と而已云ひ其開闢の時代を傳へ或傳ニ文永頃ハ緒方大膳亮惟重豊前小倉の城ニ居り智謀仁勇を以て威を震ひしなり其子緒方八郎惟為其子緒方石見守惟尚相續して在城たりしか延

匾廾藏書

東京大學圖書之印

B 23475

慶長年中水原備中守定元押し来て城を攻む城兵精力
を盡し勝負を決せさるに因て寄手堪り兼数ヶ所敗走の時
また城中に逆心の者あり矢倉に火を放ち風烈
しくて暫時に城焼亡し死せる者許多なり惟常は烟
中に紛れ出筑前国鞍手郡に落行外戚の親族な
りし原田九郎左衛門種任を頼み暫く茲にありしか

久見西月斎と号せる其后諸所を漂泊し伊豫国宇
和島にありて茲に於て終りしとぞ
或傳に曰元徳二年庚午黒崎土佐守景経小倉の城
を築き是に住し其子建武元年甲戌春長理七郎
貞家押寄日々合戦ありしか寄手強して城危き
まで及び城兵多く退散せるによりて景経為ん方なく自害

を其息修理之進景之も奮戦して討死す貞家城
を攻め落し即居城とす其嗣長野但馬守教家か時
に至り応永年中大内氏の為に亡ひ夫より大内家の持
城となり杉左馬助重兼杉主膳重光杉宮内左衛門
重植小林六郎兵衛尚任等迭々城代たり永享の頃
より仁保加賀守弘政城代たりしか嘉吉二年壬戌

太宰少弐頼冬寄来り鬨声天地を動かす如くにして
急に城を攻むれ城兵微にして防戦叶ひかたりしにより弘
政急に退城し防州に引取しより程経て城代再び為
兵を置き是を守らしむ事凡三四ヶ月なりしか
原田上江守種房多勢を以て寄兵を追散し入城
し是に居られし也其後の事分明ならされ文明の頃ハ草

池出羽守武材入道一玄菊池芝太郎武陸在城なり延
徳二年庚戌八月臼杵掃部助高直来て城を囲み息
もつかせず喚き叫て是を攻めしに因て城兵必死と成
て爰を専と防きしか共寄手堅大にして防戦に利
あらす菊池勢弱き依て城破れ一玄も臼杵に降別
府甚に討れ武陸も出城し敵中に乗りこみしに敵を

槍にて馬を突たるに因て直に飛下り刀を以て群る敵
を切拂ひ敵の騎将大貫九郎兵衛と云者馬上にて下
知するを左の腕より切て落し猶勇戦し在る武陸
に菊池平就十六歳なりしか里見源三郎以錯にて切
腹し城落により高直入城し永正の末まて茲に在
し是大永年中の事は詳ならす享禄の晩年より

天文の頃ハ長野壹岐守兊盛在城の由弘治永禄頃ハ
大内の家積冷泉五郎尊祐莚ニ居となり永禄十二年
己巳十月高橋参河守鑑種（秋種ともあり）小尾城を攻取り
此時此城ニ誰人ありしや冷泉か祐ニてありしや一説ニハ大内家之持城ニてありしと云共今明ならん　これニ立
城し（弘治ニハ弘治二年丙辰三月初四日高橋参河守鑑種小尾の城ニ入しと云）武名を擅ひまゝ
居し城を去迄ニ振ひしゝ（?）天正七年己卯三月鑑種

同國田川郡香春岳（或ハ賀春トモ）山嶽ニ有所か是を攻む城
将千手（手）美濃守重寳（重俊ともあり）防き戦ふ事數日
なり鑑種ハ不日ニ攻ぬるべきと思ひしか
要害ニ於遂し攻行くみしか或夜大風雨ニ乗じ
青ニ乗不意を討んと思慮し深更ニ及び急
ニ人數を進め寄せ山を崩すか如く鯨波を作（?）

攻る城中にハ思ひもよらぬ事なりしかば御天
し騒ぎたる上城下一と顛倒も寄手ハ競ひ
進んて攻め寄せて遂に城ハ破りし之
城代老臣戸村内記茲に在て防ぎしも寄
手ハ此年の足軽頭志井久左衛門に討れけり
重盛ハ押しも動きも下知すれども人皆周

章騒ぎて狼狽し故下知に應ぜず重盛力に
及ばず十方に暮て居たりしに笠原八左衛門是
りまて御運盡きぬれば急ぎ御自害有るべし
と云自害せよ重盛ハ聞き得たりしと有れども自害
せり残る落城するに寄り盗擅是城居城とし
小倉也城にハ小幡玄蕃宮嶋御左衛門城代

しかるに此年四月廿四日鑑種死去り法名安全寺空山宗仙其
嗣高橋太夫元種鑑種聟養子也初名九郎直種と云種實實ハ筑前秋月城主秋月筑前守次男之
継て香春嶽ニ在城し小倉ニ城代を置けり猶元嗣
のよし或書ニ曰香春嶽ニハ應永元甲戌年
より千葉信濃守興房在城也しか同廿六己卯
年七月事ありて自害す其息彈正大弼高房相
續し當城ニ有り爾してより千葉家代々此居
城ニして大永ニ至る其后の事誠ニ知らす天文
年中ニハ原田五郎義種同舎弟原田右馬太夫
貞親在城なりしか永禄四辛酉年七月十
五日大友新太郎義統率て當城を攻めん為し義
種自害するニ依て大友ゟ兵當城ニ入茲ニ居此時貞

親ハ雲州ニ在陣たりしか大変を聞急ニ香
春山嶽ニ返り速ニ大友か勢を追退て城を構造
してありしニ有しを天正元癸酉年高橋参河
守鑑種是を攻め落し員親自害し其息
八郎克親敗走す又陰徒太平記ニ曰高橋参河
守鑑種初ハ小倉ニ在城せしか往し天正七年

己卯歳春山嶽を乗り去りけり其頃香春山嶽ハ千
手美濃守重盛居住せり重盛か力者頭何某四
布の袴を武法の袴ニ直して着さんことを望み
訟へけるニ重盛許容せさりけれハ彼者本意なき
事ニ思ひ高橋鑑種ニ密通し時節を以て
引のけんと約束す同年九月重盛か妻室懐胎

しても臨月に及びしかバ山下におりて安産を兹に
囲て重盛接住儀の為に林麓の館に去りけるを
好比時をなりと思ひ彼友人盛種へ斯と告る
盛種大に喜び一千騎を帥して賀春山嶽の林麓
高畠寺と云所に陣をとれり屈産の乗と垂棘の璧
ととを以て道を假て曰秋月一四能通り使今秋一枚此所

に陣を居へ備へんに御免を蒙りたやと云送
りけれバ重盛何の思ひもなく其社御造に候へ
ばと返答をば斯しかバ盛種方便済し叶つと思ひ其
枚の枚中の頃忍て三之兵へ上り岩を轉ばし枯木を
敵て闇を作り香春の山嶽に籠ける所の兵者共
枚中に思ひ掛さる事なれば皆隊をなひされて

太刀共捜り迄ば求め盛く繋し馬に逆様にの
まゝて兼共おりて杖討と云んとてはやき焼亡に洪
水よ杯（抔）喚き叫び子共背に負ひ父共肩に掛け
て吾孫吹（ふ）ともなく遁ふともなく周（周）章騒ぎて
落行けり重盛は高城（城）寺の館に居たりしが敵
か貞春の山嶽に栗（栗）入とぞ聞く急（急）ぎ駈（駈）登（せ登）らんとせしとき

り敵を城中に充満して味方の軍卒共は皆落失たり
けれバ今は為ん方なく向ふ敵に打て掛り剛強に働
き討死す郎等古多部大炊助ハ城中にありしか味方
悉落失けれハ討せしと思へとも重盛ハ早討死なり
けれハ重盛の妻室を具して落行けり産せし子
をは乳母の小宰相懐ろに入れ外戚の祖父杵島の城

臼杵月入道宗園か許へ落行けり鑑種頓て筑紫
の岳へ入れ代けるか其後病床に命を墜し今の九郎
元種ハ十二歳なりけれ共剛将の下に弱卒なき習ニ
て鑑種勇におゐては九州に名を得たりし故家子
郎等に小出門能登守伊藤和泉守を初めとして何れ
豆剛なりしかは今度中國勢の多なるを見ても恐れ

臆せす筑紫の嶽に籠りけり下毛或書に曰天正
十四年丙戌八月吉川駿河守元春小早川左衛門
尉隆景小寺官兵衛孝高小倉に寄を来り城
攻ことを急なり城兵死に隣へり戦ひしか共
寄手強かりしかは既に本丸に攻入り城代の小橋玄蕃
宮嶋郷左衛門子息万代に勇戦振へ共進退叶

まざりしに因て小幡は塀门の側の石に腰を掛ながら
自害も宮嶋は敵中へ掛入しか篇に當て死す城兵
皆退去て香春嶽に引ぬき吉川小早川小寺等
にのり暫く在留ありし所にも利右馬頭輝元より
諸軍面々を集め今度の軍功を褒賞し猶軍
事の指揮有て陣をたゝせらる夫より吉川小早川

は又軍戦に趣きに寺は城に止り有るか毛利家に
引渡し諸所の塀に向ひ志ハく武勇誉ありし陰德
太平記に曰天正十四年八月十六日元春元長隆景輝
元藝州を立て中國八州の軍兵を引具し豊前に
へ推し渡り給ふハ輝元は長门の長府近に張し
路よ西川粉て小倉の塀を取圍まきをなされ高

橋勢堤にて謀戦の退癸春の嶽にして合戦ある
依て彼謀には黒田官兵衛へ下されて吉川小早川の両
将者手房原に邑戦張て座しある或傳に曰天
正十五年丁亥年春豊臣秀吉公九州に進発有
て薩州伐征伐ほり上洛として七月三日小倉に着
陣之しか此時秀吉公小倉の城は毛利壹岐守

成儀 本氏ハ初名ハ三治と云名乗ハ諸書に出所盛の内皆相違す蓋成者成儀成勝信成儀此の定し に賜り領
知 其高之分明ハ 規矩田川両郡一円 如何 於て充行ふとし有り
而るに慶長五年庚子石田治部少輔三成か催促に
因て成儀摂州大坂に馳せ往く毛利左衛門同所
左衛門宮田善兵衛等小倉に籠つて城代たり其比
黒田如水 初名ハ小寺官兵衛孝高ト云天正十五年丁亥秀吉卿豊之前国京都仲津築城上毛宇佐以上六郡を孝高に充行

因茲によつて孝高も郡中津に新城を築き此城に居城
とせり天正十六年戊子五月勘解由次官に任し黒田氏と称す天正十七年己
丑隠居して如水と云慶長九年甲辰三月廿日卒去五十九才之法名龍
光院如水円清と号せり

同国仲津に居城なりしが馬に鞭ちて小倉に馳せ
来り無二に城を仕かけ造作もなく城をのつとりし是より
黒田家の持城と成る也或書に曰天正十五年丁亥七月
秀吉公豊前国田川郡香春嶽の城は大餌九左衛

門時定（小笠原家の旗本大餌大炊助政信嫡男之仕へ数度の武功有り）秀吉公に不勝抗
領知（田の高不知此時代は貫文知行之由予に或説に時定には知行高は今世の石知りに〆其高六七千石程の由）香春
山嶽の近郷をも云ふ行つきしなり此時秀吉公の仰
ありし也九左衛門ヶ嶽に〆香春山嶽に付り独
立難了居しも毛利壹岐守（が門旗と成り互に篤く親しむべしとあつて其旨を壹岐守）かの仰を毛利の旗
時定に投降させられきしに依て則毛利九左衛門と

号して而子に慶長五年庚子石田三成が催促に随ひ時
定摂州大坂へ船を上りしに其時賊徒摂州伏見の城
を囲み戦ひまくしゆへ直に伏見に船を行紀速
に大手の陣に進み奮戦して死す時に八月
朔日なり時定嗣も利右十郎定房（後に九左衛門と云）香春
嶽に有りしが時定戦死の後石田謀書を定

房が元に賜り毛利壱岐守と倶に急ぎ大坂に来る
べしと又壱岐守は其事を定房に通ず定
房是に諾せずして壱岐守へ答へしは石田が逆
心世似て其隠きとす親九左衛門急勢に因て
其是非を辨ぜず伏見に於て不益の死を遂ぐ
悲しむべきの事なり而れば何んぞ大坂

に行屆けりや壹岐守是を聞大いに憤りて
香春山嶽の城を攻め潰し吉十郎が首を取
て軍神血祭として大坂へ出行屆けしと老臣生
田三郎兵衛佐倉源蔵等が儀はつて稲見六
郎治郎を同出中津に遣し黒田如水へ援
兵を頼みければ如水是より急に小倉に仕掛

壹岐守を攻めす屆けとはつて其日限を極め
て返答なり定房大に悦び如水の指揮に從ひ
香春山嶽より師出馬せり規矩郡横野原に至
り陣を取る如水は同郡湯川に来て陣を張ら
り既に明日曉天に小倉へ押寄屆しと双方示し
合ひし所に壹岐守此由を聞きて俄に七顛八倒えし

て秋隠(陰)に紛れ船に取のり大坂におもむきしによ
り如水是を攻に及ばずして城にのり入是
を取暫城に預り事を鎮め城に番兵を置(置)
て是を守らしめ中津へ帰陣有しとぞ筑紫
軍記に曰慶長五年黒田如水中津より小倉取り
毛香春山嶽城に押寄る城主毛利九左衛門小倉

の城をも毛利壹岐守が一族や今宮佐兵衛の城
攻口にて討死其男吉十郎十七歳家老共大
将として守居たり時に壹岐守ハ吉十郎を
廢して壹岐守末子に其祿を與へ遺跡をお
續さんと家老共是を聞吉十郎遺跡を續し
稚き者にあれば壹岐守我欲の擧動心得ずと

と思ふに術に如何より降参を属しと云ひ送る
になり幸ひ哉と輙く承引も如何の城請取
畢図に申付即吉十郎城を鋒として小倉に
押行又壹岐守一族家臣寄会ひて軍評定
きしが吉十郎既に降参して城渡したる
上なん鋒して押来ると聞へしかど彼評定

城止て一族家老共云けるは此様の時の為に
日来諫言申せしを今は悔るも詮なし日
頃重宝とて積み貯へたまひし金銀米銭を
取て出し諸方の持口塀矢倉矢挟間に立並
て今の用に立らるべしとからからと打笑ふ壹岐
守為方なく今は斯と思ひ主人自から髪

城押切て一齋と名を改め小倉の濱より船に
のりて京に上り建仁寺の内に隠居たるに程な
く捜しもとめ検使来て自殺させし武家高
名記に曰慶長五年九月黒田如水毛利壹岐守
が端城香春山嶽本城小倉城請取る時壹岐
守は既に上方にありて落下りて在城せしが如水押
寄来る由城を開き城を明け市退散す或書に
曰毛利壹岐守勝信其子同豊前守勝永と石
田三成に黨して科に因て国に配流せしが
後に至て父子共に大坂に於て秀頼卿に仕へし
とありし一説なれ（壹岐守は小倉を退去し）大坂に至りしが何なる故ありてや
や髪を剃て高野山へ入て隠れたりとも云 壹岐守事は

兼て遅其ハなりとも云豊前守ニ種々多説
有て一決なし其後ろ所ハ分明ならす豊前
守ハ初め市正と云ふ秀頼卿に於て群ハ忠勤にて
于小寄秀頼公篤く是ハ賞られ時至らで
豊前一国ハ充行るべき旨の誓約有て
しに依て豊前守と改めしく大坂落城の

日討死せしといへり其実ハ決せざるなり慶長
五年庚子十一月二日家康公豊前国（知行銀田川京都仲津築城上毛下毛）
（宇佐以上八郡其高三十万石也）封疆ハ小倉ニ而其高三十万石也豊後国の
内速見国東二郡（在城之時慶長四年己亥より領せられしと云ふ）其高六万石也是ハ忠興君宮津ニ併せて三拾
六万石ハ細川越中守忠興君ニ賜りしに依て同
年極冬忠興君丹後国与佐郡宮津の城（忠興君当）

城主也（於一万石代領せられし由也）より小倉の城に移らせられ而し
て右城を毀ち改て大城を築き城下を広大
に成旨大議を起させ慶長七年壬寅春成其より
城初めらるる同十三年戊申冬其功畢る数云猶年を
累て成就と云（一説に慶長十年己巳大成なりしと云共に不分明也）元和七年辛酉二月
忠興君国を改て賢員細川内記助忠利君（後に越中守君）

と称ありに譲らるる自らは下毛郡中津の城に隠居
被成三斎君（正保二年乙酉十二月二日肥後国に於て薨す法名代松向寺三斎宗立と称せ）と称す
而に寛永九年壬申忠利君肥後国飽田郡熊
本の城に移らせられし五拾四万石を領せらる同
年十二月小笠原右近太夫忠政君（後に右近将監忠真君と称せ）
播磨国明石の城（忠政公当城主には拾万石領せらる）より小倉の城

に傷ちたりき 於て方石（今城田川宗親仲津築城上毛郡と上毛郡の内なり）を以て
にもして細川君の時は城下も家並以海連続して世
豊に繁栄なりし所に小笠原君の時に至り武
家残り商家共に弥増に軒端連り大に
に繁昌せるく

倉城大略誌跋

維我藩城。環山為墉。控海為隍。可謂龍盤虎踞。金城湯池也矣。昔我先侯。自移封是邦。一因細川氏之規度。未嘗有所改作。樓櫓壯麗。民物阜康。是以天致嘉祥。世膺瑞命。實是九国之要津。一方奥區也。先是未有録其基業所殺。經營所由。以

為一冊子者。余窃恐時移物換。後世無由知其初。因捜諸記。参以聞見。或得之断簡残篇。或採之巷談野語。収載次序。以備史氏之考索。庶幾其實可徴而名不爽。如其謬説訛傳。猶未遑考訂之。切望後之賢者。筆可筆。削可削。以垂萬世

孝祥齋

倉府俗話傳

豊前国規矩郡小倉の𡋽(城)ハ古城なりといへども其始りし時代代傳も又未だ明く緒方大膳亮惟重の居城なりしといふ 昔ハ勝山の城と云 勝野の城ともいひしなり 實(寔)に僅なる小城にて丈に麁く城下も狭かりしとなり 東側ハ大橋 俗傳に是代峯

塩橋と云西［西］勢溜りの辺より請［請］小屋の前通り［前通り薬］薬
研［研］堀の際まで地限りし由西［西］側ハ三の丸西［西］の出口
門の辺より大手門の辺迄地限りといふ南側ハ薬研
堀の上なる土［土］手東の角より三の丸西［西］の出口門の所
迄地限りし由北側ハ石［石］屋町奥町裏の筋迄
大門の辺迄地限りしといふ又薬研堀より大門
の外の堀迄ハ曲輪の外構［外構］一の堀として有しと云ふ慶
長五年庚子の冬［冬］細川越中守忠興公当国の
太守となりて小倉の古城を毀［毀］き大城を築き
城下住居大小成り其時節［節］迄ハ篠崎ハ在郷名有
しが百姓屋舗町［町］ハ河原山の如く高低所もあり
夫より柳坂壺［壺］坂抔といふもありしと云ふ田畑多

く池も有りといふ森に三ヶ所有丑寅の方の森に
山王の祠有り それより三町斗り西の森には稲荷の
祠有りて其並びの森には石佛の如意輪観音堂
有り此森は椎の木斗故椎の観音と唱へし所也又
此森ハ大なる井も有りし由真言宗廣德院曹
洞宗大玄寺抔有しと云所にも外藪有りしと也

小性町田町鍛冶町紺屋町辺ハ皆以田畑或ハ沼有り
昔ハ今の大門の所貫木門有し由大門町の辺ハ
濱辺の野く此所の磯ハ山の如く海藻抔打上る日
故所の実名抔大藻といひし由此不曲輪の内に来
し時菊原又兵衛といふ者の一番に居宅抔有り
建酒造抔をし小是抔菊原と呼也百姓其外

諸人入込日々賑ひて商賣繁昌なり東より追
又小新端立續地町並たら菊京町と云しが小笠
原公御代になりて大門町と改りし由立町も田
畑沼地の有蟹喰ハ元来雁喰といふ所にて田畑な
りしが其田畑は集りて喰ひ候故それ
付て地名終いつとなく諸人蟹喰

と唱来るよし蟹喰の内にて鷹匠町の邊にて入
江の沼にてありしを新屋敷の地にて沼なり
し後小笠原公の御代になり地形築地と申町
割出来し所彼新屋敷と云よし想曲端廣かり
し時其曲橋擬宝珠ハ付たる東西の境に大橋
架りし之是より十町余南にも東西の境に橋

かくり是より豊後橋と云ふ之東曲輪發の境まで
では寶町の所々高濱と呼ぶ漁人の居所なりしが
是より規矩郡長濱 高濱より東の方十丁余所へ引きて移りし所
濱手にも貴布禰の祠ありて長濱に移されり後年小倉に
（この貴布禰の祠に蛭兒尊相殿ありし故）古より高濱に鎮座の
蛭兒恵比寿と唱ふるもの多し
（誤つ）紅雑八幡宮 此祠の旧跡は紺屋町治兵衛宅寶町二丁目
在り 同郡蒲生村にある

山上にも稿あり則今の蒲生八幡宮なり又高濱
に瑞光山西願寺 一向宗之高濱乃漁人皆此寺乃檀那之寺（本堂寺門共）に東向 境内は二丁四方程のよし
の地は 東本堂の旧跡は寶町三丁目東側錢屋 在し 紺屋町 十丁目
宇左衛門宅地く
七北側に並ぶ 東角に移寺高濱に立甚山東岸寺
西山流浄土宗之寺の岸に在りし故東岸寺と名付たると云寺の
境内凡二丁四方程の由此旧跡は大橋東か大坂屋吉助宅地之
地より 米町五丁目の北側に移り高濱より

京町十二丁目西願寺現存
米町六丁目東岸寺現存

東の方は野原にて田畑なく松其外雑木林有て
所々に竹藪有り別る駒おとのハたんちくなりと云
土手の野原墓所場有所にありしが南の方に墓
所の側に石佛坐像是地蔵尊にてありし夫より七八
間西に井有りしといふ高所より十八九町だか其辰巳
の方に来てありて石佛座像是不動尊ありし由

其南の方一町程の所にもありしの森ありしといひ
土手七間の低き所にありし杉の森の辺を
曲輪の内に来りし趣有り香春口門に
堀の付きたる沼ありそのの側に大木の松二
本有りしが其辺よりて曲輪の内になる
と云ふ香春口門脇有り建の材木を石武

東ハ松を以て調ふるのみなり東曲輪地取
り出来町割りて夫々町名定り武家屋
敷町家の所相分しく。其後士通りの面々者
皆以西曲輪ニ在て知行取無役の族ハ夫ニ乃
知行所ニ住宅之小身ハ面々も数多在住宅故
東曲輪ニハ士通りの居宅も附し大身歴
々ハ下屋敷斗許され夫々の家来共住居有
其内知行の者共も多く許されし 其外ニは
来軽き者共の住宅廿々許されしと云ふ小笠
原公御代ニなりて東曲輪ニ士分居宅繁く
建續末々の者共迄住宅も新ニ増なり町家
も東西の町々ニ至るまでも最寄ハ織ニ小者増なる

ゐるよりそ河岸し所に小笠原公御代になり
端々（端）々の所に出造形（端）建連り大阪に繁
昌するや東田橋の内（馬）借町三ヶ松右船場迄
すべて片野村の内にて河岸しと申り板右
船場と云所名いゝにし一船の出入有たる所に
ては河岸しと云ふその時（節）番所の在りし

所と云ふ（傳）一其旧（跡）則右船場町三丁目北側の
中程に在るなり三本松ものは（何れ）もの所より出栽
右平山安国寺河岸細川公の御代その道迄に
於門橋出来しより人是銭安国寺橋と唱
ふ此橋銭当に越し直に左側に（籔）に付
て通り抜け青春口番所前に出る所に

竪町安国寺現存

細川公御代まで河原しや小笠原殿御
代になりて是より跡御座丁出来夫より今
此角通り筋となりしといふ又安国寺ハ竪町に
移し細川公御代のうち小笠原殿の
御代になりてのうちか今の所にて東曲輪の角に
て今に此世甚所も名残唱へざる所は坪尾町五

西蓮寺円応寺並在円応寺筋

丁目角より東へ菊田筋といふ由一説には坪
尾町一の筋の東の名残菊田筋といふなり西蓮寺
此所より円応寺此所辺の毛嶋町といふ也夫よ
り東の未下小路といふより雁治町薬師堂の
通より祥雲寺の通より西東の芳野筋といふ
由古へ此通りづきの所より芳野普賢堂え辻堂

永照寺現在米町七丁目

はましし由来改昔の筋と云なりし永照寺裏
門筋は繁元通りといふなりし博労町東の方は濱
町といふ御堂の方より東の方は毘沙門堂の辺より東北めうが谷此辺など
長利壹岐守殿[殿]時代まで御代官居ありし今の三の
丸の所なりてはり一説には今の二[二]の丸の所に
は御代官おゐゝ在りしといふ又三の丸の所は町
家にて先しありしとの事なりされも利殿時代より町家也僅ばかり有しく其内傳町に細川公時
代迄は諸職[職]人の居所となりし職人町と改りし
由諸町は小笠原公の御代になりて室[室]所と成り
しかし片側町は南側ばかりなりし故細川
公御代御目付達の地形[形]広くなりて小倉の家並[並]
出来八百屋町奥町と古町になりしといふよく

本就寺在
米町五丁目

文和年中魚町の内に蛭児の祠を建立して
在し所に元文四年己未五月廿一日右の祠を大川の側に移し稲荷
二の丸江原東馬屋鋪に心光寺阿り福原屋鋪
に本就寺阿りしか其外の尾おの寺地ありては本
北の大凡衛士屋鋪またはもえん播士代に石地蔵を
堀出したる由是を東網屋町の文殊堂に
納めしと其外にも石地蔵の笠石を堀出した

又角に笠原帯刀屋鋪に下條三郎兵衛住居の
時石塔その外墓所乃田石杯を数多く堀
出したるよし其後澀田凡舎人住居の時家
来同様門屋様門が居所曲竈乃下なる地中
より石塔の墓石を堀出したる事もは只に
笠原監物屋鋪に奥田種太郎住居の時分石

路上備前堀出来たるより高橋家の時
西山宗の法輪山安全寺浄土宗鎮西派之流の護念
山心光寺は菩提所にて安全寺と今御城内松
の丸此所なり心光寺は今此二の丸の内に有
りしが大役門番所の後石垣の上に近
来迄曲りたる古木の松有りしが是ハ心光寺
の境内に有りし木なりしにて心光寺松と云
ひ来りし之慶長年中に細川公安全寺坂古
館場町一丁目西側の角に移さる此所ハ沼
沢埋めたる所とて心光寺ハ田町一丁目東側に
移きり此所ハ田畑にて有りし由も利家の
時日蓮宗長寿山本就龍寺は菩提所にて今

旦過橋ハ魚町より馬借ヱ渡る処ニ架す

魚町四丁目南側の東角ヱ移されし也細川公の時

の二の丸の内ニ在りし我細川公の時東曲橋 旦たん

西ゟ橋北西向ニ小泰勝院臨済宗元細川幽斎公の菩提所ニ入山号ハ瑞雲山

泰厳寺曹洞宗ニテ織田信長公の菩提所なり 秀林院臨済宗ニテ細川忠興公の奥方秀林院殿の菩提所秀林院殿ハ明智日向守光秀の息女なりといふ

竹上三ヶ寺相並て在り皆細

川公の建立なり細川公肥後の国へ移り給ひし

時右三ヶ寺ハ随ひ行き泰勝院ハ龍田山泰勝寺と改号さる

宗玄寺及南善寺在馬借

は熊本ニ在り泰厳寺ハ八代ニ在り秀林院

は断絶之小笠原の時ニ至り泰勝院乃跡は宗

玄寺となり泰厳寺の跡ハ開善寺となり秀

林院乃跡ハ小倉ニ在る寛文元年

辛丑小倉崇高寺我京町ニ在り東乃跡ニ鎮西

浄土寺乃跡ニ移されし此時より山崇高寺

乃在りし所ハ御船入乃内手の西之細川公の時

東瑞尾町筋東乃土手ニ付て一寺（某寺名號伝らず一説ニ大昌寺と云ひし由）

（わかりがたし）有り細川公御家来某（某其姓名號伝らず）乃菩

提所ニて有りしと以ふ小笠原公の時より大

隆寺と成る也本堂前の門は最前当寺乃東門ニて

鐘楼脇の門ニて裏門ニて有りし由にて乃東門

是ハ延宝年中（元和の初めとも）ニ建立之由大和守長直

公の御部屋様（松平阿波の内より今御用屋敷畑の所也）解体し故其

御殿當寺ニ建立ありしと之又当寺乃庫裡

ハ正保の比（寛永年中とも）建立有り是ハ親組郡久字

（門司）蔭山乃城乳置所ニて有りし古材木ニて

建たるもの由有り此寺乃西隣ニ武家屋

蓮因西部十太夫住宅有し所に延寶七年
未七月西部氏改易の後右之尾浦當寺
の境内に入て有り細川公の時京町筋東の詰
北側に一寺を建立有て浄安寺と号す仲津郡今井浦より
本森田山浄安寺京都本願寺末寺なり住持良慶浄安寺開祖慶善孫
に譲り依之良安は今井の寺を子は世伜に看坊を置

其身は小倉の寺を出て住持をしたるか中心興公同
国仲津の地に御隠居の時仰に随ひ良慶
仲津へ往良慶子慶安経て小倉の寺に住持を
其子蓮休其子良覚玄相続して小倉の寺に
在りし所に寛文元年辛丑小笠原公の仰により
小倉の寺を建差上良覚は今井の浄喜寺へ引越すから依之差上し寺の博労町東の鎮北側

（光清徳蓮寺現在博労町）

に寺地を賜りしかば此所に光清寺徳蓮
寺を建立あるなり
小倉乃鎮守祇園西社ハ細川忠興乃建立なり
古へ規矩郡より不動山（今愛宕山西）の祇園乃小祠（同郡祇園町村の神）
（往昔勧請　御勧請ましまし　此社は）
せしを元和三年丁巳春忠興公今の
地に移さる是ぞ社神殿へ（此時川口左衛門種茂社司となる）

亦昔より同郡片野村にも祇園の祠（此旧跡ハ猪木三本松也）
（とハいへども其所詳ならず三本松ハ在此村の内なり　古へ片野）
ありしが右同所に忠興
公今の地に移されぬ是小社の神殿なり（此時高山孫太夫定直神司となる）
忠興公改而右の両社を建給ひ崇敬なり多く
小倉鎮守の神とあふ給ふ　祇園社例年の神事
雖ハ元和年中忠興公神事を給ふ由其定日八九月

廿日来りし處に元禄三年庚午より九月十一日
に改りし、又例年六月に祇園乃神事有り
是は細川公の時よりも有り来りしが、此の忠興公
御代よりの事なる由なれど其御息越中守
忠利公の御代よりハ別して其祭りし時節は殊
の外賑しきことにて東西の町々よりかざりの祢り物

杯出来追れありしが、所々に小笠原公の御代
に至り寛永年中正保の頃東西両町断られ間三
ヶ町より祇園神事には踊り出しなどの頃
有之、踊り祭り夫より以後追々町々より願出
以て踊り出来之最祭には踊りも増する
ようになりしが其頃第宜来

享保比中比より漸高上したるなり
神事ハ定日ニ最前六月十一日十二日神楽の御幸
ありて踊りけり十三日湯立神楽有りし所ニ寶
暦の末より右の定日後り六月十四日十九日神楽
の御幸ありて踊りけり廿日湯立神楽乃執行
あり新羅ハ幡宮往古より高濱ニ鎮座ありし

とりへども其の由来詳ならず永正大永の頃
の社司小嵩田伊豆と云ひし由其餘の事
傳なし此祠兵乱ニあひ衰敗年久しかりし
が高橋参河守鎮種小倉の城主たりしと
紀神殿残修造有りし潤色ス其後壹岐守
成義小倉の城ニ在し比神領ニ寄附有り

ことく天正年中より高山刑部定元此社
司なり然るに慶長年中より細川忠興公
豊前の国守となられ小倉の古城をひらき
改為大條を築き城下の曲輪を廣めらる
るに依て新く東曲輪を開發ありて守高濱
も曲輪の内となりし故同郡蒲生村の山上

に神殿を造立有是に観能八幡宮を移さる
社司刑部定元蒲生に住し猶當社司たりしか元
の如し刑部子高山孫太夫相續し蒲生の
社司たりし所に元和三年丁巳二月忠興公小倉
に祇園社を建立有り川江織部種栄崎
八幡宮の社司川江左衛門故衛
三男なり織部後ち左衛門と改南神殿の社司となり孫太

夫子高山左京定次〔定政〕秘蔵せし北の社司を
譲り付代々至り蒲生氏郷へ兼帯故辞せ
り蒲生依て没して蒲生の社司お定り夫より已
来社司退転せし
右者世俗の云伝へしるのみにて其虚実分明
ならず全く信用なし難候へども書し

任せ其旧記拭ふて是を記し畢

寛政辛亥仲春日

八十六歳
孝祥舟

細川家之時御家中高橋の西ニ居屋敷并
諸お郷より小倉居之図

二の丸

表口三拾四間二尺五寸
西のり東四十三間
西四十六間
右者安永年中福原数馬居屋鋪之
知行壱万石
加賀山隼人

二ノ丸

表口四拾二間二尺五寸
西のり東四拾六間
西三十九間五尺
右者安永年中大羽縫殿居屋鋪之
知行壱万五千石
壱万千石ととなる
有吉頼母
大膳

二ノ丸

表口三拾七間七尺
のり東三十九間五尺
西三十四間
右者安永年中小笠原四帯刀居屋鋪之
知行壱万石
藪内匠

二ノ丸

表口弐拾九間
のり東三十四間
西三十一間一尺
右者安永年中小笠原監物居屋鋪之
知行五千石
細川家御家老

二ノ九

表口三十一間弐尺八寸
奥行東三拾一間壱尺八
西　弐拾六間四尺五寸

右者安永年中東居屋鋪之

知行壱万石
米田監物

二ノ九

表口八拾九間半
奥行南弐拾壱間弐尺
小　十二間壱尺八

知行壱万石
津　澤村大学

右者安永年中新屋鋪之

知行弐万五千石
長岡佐渡

表口三拾五間弐尺
奥行南三拾四間壱尺
北四拾壱間

右者安永年中松下屋鋪之
二ノ九

知行三千石
氏家志摩

表口四拾四間弐尺八
奥行東弐拾弐間弐尺
西　弐拾弐間

右者安永年中二ノ木跡居屋鋪之

篠浮

表ハ三行ヲ
同裏三行九字定
又 三十八字定

右者安永年中龍田登居庵滞留之　沼田歌ヶ由

紀行ニテ名

追加

小倉御置社の宝物に出羽の面と三番の面あり
二ツ共希代之名作なり世に云伝へしは面ハ紀
州郡道来の炭山より出て此山に猿数疋居
して常に炭竈の辺に来り掘し故炭焼ども
是を愛して折々は喰物抔與へし故おの
づから人に馴染てことに時節ハ登秋共に炭
竈の辺をはなれず寐起して居たりしが
或秋炭焼ども採入たる其隙に猿数疋来て
飯を盗み喰ひし故炭焼ども聞終大き

に怒り退きければ猿ども迯去る時二つの両銭
取落せし銭は炭焼ども是銭拾ひ取りしが何
の用にもたゝぬものなれば酒に代んとて小
倉京町三丁目炭売尾金兵衛店に持行酒に
代て帰りし人物に在之両銭見る人毎に是は
希代なるものゝ郷と皆感じのり人仏れは

有る我拆と賞美せし故金兵衛大に歓び家
の宝物になさんとて前を拵一二つの両銭是を納
め居宅の神棚へ供へ甚崇敬せし所に安永
二年己丑 安永元年壬辰 十二月に葉茶屋出火して居宅家財
皆悉皆焼失せしに右の両銭は庭の側に残りて有し
故寔に不思議なりとて金兵衛敬心

弥増ニ西陣賊盛數家ニ至ハおそれ有りと相云
祇園社ニ奉納せしと云
廣壽山福聚寺ハ忠真公の御開基ニ而寛文
四年甲辰十二月足立山の麓不老庵の旧跡ニ而
彩ちを占創建の御作りニお移り翌年三月右の
御普請御成就同月十五日即非和尚の寺有り此
寺に隠居ニ御小寺有り忠雄公御代ニ至り延宝四年
丙辰十一月寺の地にて御易ニ改て諸堂方丈厨庫己
の外彼是御造立の御作りニお移り同七年己未十
月右の御普請御成就有り此時住職法雲和尚
有り天明九年己酉正月朔日夜出火有りて御寺悉
悉焼失延宝七年より天明九年迄凡一百十一年ニ

廣寿山禅迦寺ハ丸屋吉右衛門元之建立なり其料銀
百二十貫目餘を以て成就のよし吉右衛門ハ法祈願
明栄學院甲秀法印弟子之忠真公明石より小倉へ供
移りの時兄松林院長秀法印と同しく小倉ニ来る其
後忠真公大小姓ニ召出さるへき段沙汰ニ相成る所
是を辞し商家となる幼年より人丸明神を信仰するを

依而人丸の丸の字を以て門名を丸屋と称しける
町家を構へ呉服商売を家業とし当上富貴ニ募
りし故数ヶ所も建立又諸寺社へ寄進数多なりし
よし其子丸屋吉右衛門元安其子丸屋傳七好生三
代相續ありしに傳七ニ至り困窮して断絶なり
于時寛政三年辛亥仲春日

生年八十六
春日藏人源信映

于時文化十壬酉年六月上旬　密道峯意写之

密教山廣隆寺實應代

蜂谷加六藏

明治三十五年二月五日夜校了鷗外漁史源高湛